



ち★ネット!

「顔の見える地域連携」を目指した多職種での情報交換と学びの会
それが、地域医療ネットワークの会です!

2023年10月21日 第45回 地域医療ネットワークの会

家で過ごしたい認知症夫婦 ～あなたならどうかかわる?～

わが国は2007年に超高齢社会に突入しました。また認知症高齢者の数は、団塊の世代が75歳以上となる2025年には約700万人、65歳以上の高齢者の約5人に1人に達することが見込まれています。今や認知症は誰もが関わる可能性のある身近な病気であり、中には夫婦で認知症を患っている方々もいます。認知症の人の意思が尊重され、出来る限り住み慣れた地域の良い環境で、その夫婦らしく暮らし続けるには何が出来るのか、多職種の方と意見交換をしながら、認知症夫婦のACPについて意見交換をしました。今回は、数年ぶりの対面(形式)で開催し、21施設49名の参加がありました。

事例紹介

鷲ヶ峯地域包括支援センター 宮下 容子
あいばなケアセンター宮前 荻原 美代子

グループワーク

全体発表

座長 地域医療ネットワークの会 世話人 あいばなケアセンター宮前 荻原 美代子



宮下氏からは、夫婦ともに認知機能低下があったため、地域の人々や御家族は生活に不安を抱いていましたが、本人達が困っている自覚が低くサービス利用に繋がらなかった事例の紹介がありました。

荻原氏からは、夫が認知症を指摘されていたが、妻は「まだ困っていないから大丈夫」「近所の人に知られたくない」との理由で介護サービスの利用を希望されなかったが、安心した生活を送るために何が出来るのかを妻と話し合いながら継続的に関わり、利用開始に繋がった事例の発表がありました。

今回は様々な専門職が混ざった7つのグループに分かれ、意見交換を行いました。初対面の方も多かった印象ですが、終始明るい雰囲気の中、笑顔で発言する姿も多く見られ、「認知症患者との関わり」について経験談も踏まえた活発な意見交換がされていました。

全体発表では「本人の意志だけでは決めきれない」「第三者を交えた意思決定支援が必要」「エンディングノートの活用をすることが大事である」等、各グループの内容を共有することができました。また、訪問診療の依頼は受けるが実際の診療を本人達が希望せず繋がらないケースが多く、訪問医としては医療が出来ているのか不安を日々感じていることや、核家族化が多くなり認知症夫婦の経済管理が課題となり他家族の介入を拒む事も多いという話もあり、様々な視点からの意見交換を行うことが出来ました。質疑応答の中では包括が取り組んでいる認知症カフェについての話があり、参加者の中で驚きと、新たな発見を共有することができました。



アンケートでは、「支援自体を拒否する方の支援や、ACPはなかなか上手に話せていないことが今後の課題」「治療の場所と生活の場所の対応の違いを実感した。それぞれの役割をしっかりと理解して、認知症の方の意思決定の支援を連携して支えていくことが大切だと感じた」等の意見がありました。また「対面で顔見知りになれば、話もとてもしやすく良かった」「久しぶりの対面で、改めて、対面の良さを感じました。新しい出会いや直接、お話しを交わす事ができ、有意義な時間を過ごす事が出来ました」という意見も頂きました。

今回の症例発表では認知症患者の在宅医療の現状を共有し、それぞれの経験を伝えることで改めて「医療」と「日常生活」の両立が難しい事を考えることが出来ました。そのことから、患者自身が望む医療と医療者が提供できる医療をすり合わせていき、患者が望む生活に近づけることが出来るよう改めて早期からの「人生会議」が必要だと感じる事が出来ました。今回のグループワークの中でも「40過ぎたらACP」という言葉がとても印象的でした。患者・家族の意思決定支援の為に改めてACPの必要性を振り返る機会になったと思います。